

日本記者クラブ会報

第403号
2003年
(平成15年)
9月10日発行

〒100-0001
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル
◎社団法人 日本記者クラブ

李外相会見に二一五人が出席

記者研修会にも七八人

一九七八年八月二二日、北京で黄華、園田両外相により日中の平和友好条約が調印されました。ことは二五周年です。わが国からは



写真=時事通信

この日、韓国の中央日報(朝刊紙)は、北京での六カ国協議が二七日からと一面トップで、朝日(夕刊)もワシントン発で「北朝鮮側が二六、二七日開催という日米韓三国の提案を原則的に了承すると米側に伝えていたことが明らかになった」と報じました。

午前中の外相会談、午後の小泉首相との会談のあと、四時四十分から四五分間という約束での会見でした。

詰めの調整のため平壤(七、九日)を訪問した王毅・外務次官(元駐日公使)と福田官房長官との会談(北京・一〇日)もあり、さらにモスクワでのロシア、北朝鮮、韓国の準備会議(一二日)やワシントンでの日米韓非公式会議(一三、一四日)など関係国の事前協議の直前でした。

すぐに質疑応答へ

そのため出席者も二五人と、夏場にはまれな大型会見になりました。お盆の週ということもあってD会員の方は約五〇人でしたが、各社の現役、在京特派員などが約一七〇人も集まりました。人数はそんなに意味はありませんが、とにかく絶好のタイミングでした。

車から出てくるや、李外相は「ここは前に来たことがありますよ」と相好をくずし足早に専用リフトへ。中で、李鵬首相会見(八九年)の際に新聞司長として同行したときのことを話し、貴賓室へ。司会の伊藤芳明企画委員の求めに応じ、流れるような筆で「道義在和衷」と揮毫をすませると、「さあ、行きましょう」と公見場へ(写真)。

この間、一分ちよつと。席に着くと「すぐにみなさんの質問に答えることで、再び迎えてくれた日本のプレスの温情に報いたい」と、予定では一〇分だった冒頭発言も一分程度に。予定時間を一五分延長し、約一時間質問に答えました。発言内容は川口外相、小泉首相会談でのものと重なるものだったようですが、口八丁手八丁という印象でした。むしろかしい六カ国協議を斡旋、開催するホスト国の外相としての力量を見せつけたのではないのでしょうか。

上海での脱北支援邦人拘束のニュースが急に飛び込んだりで、取材にきたテレビカメラの多さの割には、その夜の各局の扱いは地味

なものでした。翌日朝刊も外相、首相会談からの記事が主で、日経以外は小さな扱いでした。事務局としては、日本側からの取材にはかりよるのではなく、こういう場合は「李外相会見」自体を材料に、ベテラン記者に奥行きのある記事を書いてもらいたいものだという気持ちには正直残りました。しかし、あれだけ多くの記者が外相の一言一句、その言い回し、人柄の一端などを目撃した意味は大きかったのではないのでしょうか。

内容でのポイントは二つで、一つは六カ国協議での拉致問題の扱い。これについては日本政府の顔をたてながらも、外相は「基本的には二国間で」ときちんと述べていました。もう一つは日中の首脳交流再開と歴史問題。その背景とどうか、決め手にもなるかもしれない中国側の「対日関係新思考」をズバリきいた質問には、直接答えず、三つの対日原則を時間をかけて説明しました。これまでと変わらない原則ですが、その説明の仕方、ソフトな表現に従来とは異なるものを感じられました。

実はこの会見は当初の日程を変更してもらい実現したものです。今回はテレビ、新聞各一社とのインタビューだけで、クラブでの会見なしという大使館の報道担当からの返事でしたので、無理をいって武大偉大使にお目にかかりました(7・29)。

その席で、これまでのクラブでの中国要人会見の実績をあらためて説明し、二つのインタビューとは別にクラブで公式会見を行うよう日程変更を要請しました。大使は「努力してみます」と約束してくれました。「日本記者クラブで会見してもあまり報道されないし、OBが長々と意見を述べるので、北京では不満なんです」という非公式情報も得ていたので、安心はしていませんでした。しかし、中国大使館のなみなみならぬ尽力で、五日、クラブでの会見に応じることが決まりました。

クラブ会見が割り込んだため、先に決まっていたNHK、中日新聞のインタビューの時間と場所についても影響を与えてしまいました。両社の担当の方におわびし、

クラブ会見後の九階会議室での単独取材ということで協力していただきました。いずれも快く応じていただき助かりました。

鄧小平会見から二五年

平和友好条約の調印は八月二二日ですが、批准は一〇月二三日でした。このとき来日したのが鄧小平副首相(当時)でした。人民服姿で皇居での歓迎宴に出席し、クラブでの記者会見で千両役者ぶりを発揮し、熱烈な日中友好ブームを巻き起こしました。それまで中国の要人は「そういう習慣がありませんので」と、西側スタイルの公式会見には応じませんでした。

鄧小平会見の成功により、以後訪日する中国の要人はことごとくクラブで会見をするようになりましたし、中国国内でも会見を行うようになります。その意味では鄧小平会見は、クラブの三四年の歴史のなかでも、特筆に値するものでした。

いまでもよくおぼえています。が、挙手による自由質問ではなく、小島章伸会員(当時・副理事

長)による代表質問形式でした。事務局が一番苦労し、つらかったのは、中国側がどうしても国交のない国の記者は困るというので、会員であった韓国の記者などに、中国要人が初めて行うこの会見の意義を理解を求め、出席を遠慮してもらわなければならなかったことです。

今回の李外相は中国要人として三三人目のゲストでした。ジャーナリズムの原則に揺るぎない自信を持ち、かつ寛恕を忘れず、現実的に積み重ねてきた諸先輩の努力が今日のクラブの活動を支えているといえます。夏枯れで分量をいつもの倍あてがわれたので、冗長になりましたが、過去をふり返らせてもらいました。

ところで、月末の記者研修には、四五社、七八人が参加しました。「地方分権」の研究会を企画し、司会をした菅沼堅吾委員と、研究会の講師を引き受けてくださった中馬清福、G・ヒールシャール会員にあらためてお礼申しあげます。参加者の声は次号で特集。

(専務理事 岩崎玄道)

木村 良樹 和歌山県知事



8.5 (火) 昼食会 委員 出席 61人
川戸孝男 山田

▼縦横に「和歌山モデル」

木村良樹知事は、新しいタイプの政治家であり、やはり改革派の知事だろう。「地方から変える」を繰り返す。また「和歌山らしさ」を強調してやまない。

和歌山発を特色づけた政策の第一は「緑の雇用」事業だ。不況がいつそう深刻化、リストラと企業倒産は拡大する一方だが、知事は都市での雇用確保を森林保全と結びつけた。全国に先駆け、他府県と連携し、中央を動かした。

さらに「地方基準の公共事業」の提案。道路、河川、砂防など一律に中央の考えで事業化されているのは予算のむだづかいだ、と。相対に激しい。中山間地域で交通量の少ないところでは七メートル幅員を改め、「一・五車線道路」でコス

ト削減をはかっている。

こうして六十近い政策を並べたリストを「和歌山モデル」と呼ぶ。観光、廃棄物、治安など語りに語る。大小さまざま、整理されていないのが難といえるが、なるほどと思わせる政治家だ。

中央からの集権性が強い、また旧来を踏襲する形の政治への拒否反応は強い。国会での中央官僚の答弁とか全国知事会の従来の議事や人事の運営の話には「予定調和」という表現で顔をしかめた。

歯切れがいい。語り口は早い。闘志がほとばしる感じ。話題も次から次へ。「いま、何の話やったかいな」とにっこり。大阪弁が巧みに交じる。縦横無尽か得意即妙か、いやいや天衣無縫かな。

冒頭では「エセ改革派です」とぎよつとさせておき、改革派知事数人との共通点・相違点をうまく説明する形で、結局は改革派知事を印象づけた一時間だった。個人会員（朝日新聞出身）

川島 正英

李肇星 中国外相

▼対日重視の方針をアピール

とにかく能弁。少々饒舌と感じた人もいたかもしれない。張りがあり、よく通る声。素材で親しみやすい風貌ながら、原則は決して譲らない押し強さには定評がある。三月に外相就任後、初の来日。この機会を利用して、胡錦濤新指導部の「積極外交」「対日重視」の方針を十分にアピールしたいとの意気込みがしっかりと伝わってきた。

「中国は長期にわたって忍耐強く外交努力を続けてきた」。北朝鮮の核問題については、八月初めに急きよ訪朝した王毅外務次官が都合の良い航空便がなく陸路で平



写真=時事 8.11 (月) 記者会見 委員 出席 215人
伊藤芳明 楊宇二 等書記官 通訳

壤を訪ねたエピソードを披露、六カ国協議の成功に向けた粘り強い「調停」を強調した。

北朝鮮の独裁的な体制を保証すべきか、とのデリケートな質問は「われわれが議論しているのは国家間の関係であり、おっしゃるような体制の問題がその範囲に入るのかは分からない」とさらりとかわす。一九八五年から五年間、外務省スポークスマンを務めた経験で培った記者対処法か。

駐米大使をこなした外務省きつての米国通。英語とフランス語に堪能ながら「日本語は話せない」（外相）が、対日関係の質問については最も時間をかけて丁寧な答えた。戦争について「今の日本国民に責任はない」としながらも「A級戦犯は一般の戦没者とは違う重要な責任を負わなければならない」「日本の指導者は参拝すべきではない」と言明、名指しは避けながらも小泉純一郎首相の靖国参拝継続に反対を表明した。残念だったのは、私も質問者り

ク ラ ブ ゲ ス ト



8. 13 (水) 研究会
「北朝鮮」⑨
司会 渡辺興二郎 委員
出席 115人

▼アジア版ヘルシンキ会議
下斗米教授は忙しい。大学の本務の傍ら日本国際政治学会理事長の大役を担う。二千以上の会員を擁するこの組織の改革に取り組む一方、海外の学会との交流にも意欲を燃やす。二年前まで新聞社の客員論説委員として健筆を振るったことも記憶に新しい。多彩な活動を通じて培った人脈、アンテナは世界的な広がりをもつ。

「ソ連・ロシアと北朝鮮」と題

ストに入っていないながら、時間切れで順番が回ってこなかったこと。北京時代、当時の朱鎔基首相や唐家璇外相に質問したことがあるが、こんなことは一度もなかった。中国側の言う「靖国参拝反対」と「小泉首相の早期訪中期待」の二つの矛盾をどう解決できるか、

下斗米 伸夫 法政大学教授

さらに踏み込んで聞くつもりだった。日本記者クラブの会見は、多くのメディアで共有する貴重な取材の機会である。司会者にはより積極的かつ柔軟な議事進行を望みたい。

共同通信中国報道研究会事務局
長 森 保裕

した日本記者クラブ研究会は、その情報力が並々でないことをあらためて印象づけた。と同時に国際政治の歴史と理論を踏まえた分析、洞察の確かさに感銘を受けた聴衆も多かったのではないか。

教授は、朝鮮半島をめぐる六カ国協議をアジア版ヘルシンキ会議と呼んだ。この例えが面白い。

一九七〇年代、米ソ戦略兵器制限交渉(SALT)と同時進行したこの東西欧州三十五カ国会議は七五年、歴史的なヘルシンキ宣言を生み出す。

安全保障、経済、環境、人権など幅広い交流、協力をうたったこの最終文書の調印もあって、共産圏での人権抑圧や外国人特派員へ

の規制は和らいだ。七〇年代末から五年間モスクワに駐在した私も、その恩恵を受けた一人である。八〇年代、この流れは加速し、ついに冷戦構造そのものを突き崩すに至る。

これと似たプロセスの始まり、朝鮮半島協議をとらえる教授の

シルヴァン・シャローム イスラエル副首相兼外相



見学会委員
記者明
8. 26 (火) 伊藤芳明
司会 伊藤池田 102人
出席

指摘は刺激的だ。安保とからめて人権問題を粘り強く解決していった欧州の経験。それは拉致問題などで行き悩む日朝関係の打開にも生かせるのではないかと感じさせられた。

個人会員(朝日新聞出身)
高山 智

▼「時限爆弾」下のロードマップ

中東では、明日を予測してはならない——言い古された言葉だ。しかし、来日直前に、二十一人の犠牲者が出たエルサレムでの路線バスをねらった大規模な自爆テロが起き、イスラエル軍のパレスチナ過激派に対する軍事作戦が本格化する中で、中東和平構想のロードマップ(三段階の行程表)が、再び「憎悪と暴力の連鎖」という

迷路に入り込みつつある。

ロードマップは機能するのか? 「時計がチカチカ鳴っている時限爆弾がある時に、パレスチナ自治政府のアッバス首相が治安部門を統括し、テロ組織解体に向けた戦略的政策を実行しない限り、中東和平ロードマップは進展しない」。チュニジア生まれで四十五歳のシャローム氏は両手を前に組んで言葉に力を込めた。

「日本はパレスチナ自治政府に六億八千万ドルの援助をしてい。ハマスの資産を凍結するなど、影響力を行使してほしい」と経済記者出身らしい要望も出された。だが、現実にパレスチナの治安を掌握しているのは、アラファト自

治政府議長である。来日中、アラファト氏によって、パレスチナ自治政府の治安担当者が刷新された、というニュースが流れた。質疑では「アラファト議長の存在が和平の障害になっている」と、アッバス政権の二重構造を指摘する発言もなされた。

かつて、オスロ合意でアラフ

川口 順子 外相



8.27 (水) 食会 昼食会
司会 岡元隆治 理事
出席 小池洋次 委員
141人

▼米国の抑止力への信頼

北朝鮮の核開発問題をめぐる六カ国協議が北京で始まった八月二十七日という絶妙のタイミングで、昼食会は開かれた。この日の川口外相は赤のジャケットで、おなじみの勝負服姿。話の中身も力がかもったのか、北朝鮮情勢に限らず、今後の日本外交の課題として、テロとの戦いと大量破壊兵器

アト議長と握手した故ラビン首相は、「真の敵と和解してこそ平和が生まれる」と語った。

ロードマップ達成の道のりは険しかろう。若いシャローム氏の真の敵との交渉に期待したい。

テレビ朝日コメンテーター

川村 晃司

不拡散への取り組み、アフガン復興など「平和の定着」構想、国連改革への取り組み——と、三本柱を立てた包括的な内容になった。特に、国連改革に関しては、有識者懇談会を近く発足させ、来年五月ごろ、提言してもらうという新たな方針を示した。

質疑応答は、最大の関心事である六カ国協議にほぼ集中。川口外相は、米朝二国間で不可侵の確約を結んだ場合の日本への影響を問われると、「いかなる形で北朝鮮の安全保障懸念に対応する枠組みができたとしても、わが国が米国の核抑止の下にあることは全く変わらないし、その基盤を崩すよう

なことを米国がやるはずもない」と明言。「日本に大きな問題を生じる枠組みにはしない」とも述べ、悪影響の恐れを明確に否定した。この回答には伏線がある。米朝不可侵条約が米国の核抑止戦略を制約し、日本の安全保障体制に悪影響を及ぼすとの懸念が国内の一部から出ていたからだ。外交トツ

「地方から日本を変える—地方分権の進め方」

▼国に改革迫る勇気と覚悟

「マスコミも地方分権問題がよくわかっていないな」。三人が暗に発したメッセージである。

増田氏らは新しい日本をつくる国民会議（21世紀臨調）の一員として、前日に小泉内閣の「三位一体改革」に対する緊急提言をしたばかり。だが、約九兆円の国庫補助負担金の廃止を柱にした提言は報道では重視されなかった。

プがこの時期、米国の抑止力への信頼感を表明したことは、けつして悪いことではない。米国がやむなく軍事的オプションを選択する場合、北朝鮮の体制を転覆させ、圧倒的勝利を収めるだけの戦闘態勢を整えているからである。

読売新聞調査研究本部
笹島 雅彦

税源移譲と引き換えとはいえず、地方が補助金をいらないというのは勇気がいる。これまで地方から個別の補助金について意思表示をしたことはほとんどなかった。

今回の提言は「六県が共同で補助金を一つずつ検証した結果」（増田氏）であり、「国からいじめに遭う」（北川氏）ことを覚悟して、「清水の舞台から飛び降りるつもりで出した」（堂本氏）ものだ。



北川正恭・早大大学院教授



増田寛也・岩手県知事



堂本暁子・千葉県知事

ク ラ ブ ゲ ス ト

その勇気を十分評価してもらえなかったといいたらしい。

小泉内閣の「三位一体改革」では三年間に約四兆円の補助負担金を削減することになっている。しかし、その程度の削減では、「国が悪知恵を働かせれば、地方間の補助金の取り合いが激しくなるだけで、霞が関の仕事の仕方は少しも変わらないことになりかねない」と増田氏は警告する。

国と地方の庇護・依存の関係を改め、国ではなく県民に説明責任を果たせるように「仕事の仕方をすっかり変えることが必要」（北川氏）なのに、数字合わせて改革が終わってしまう危険がある。

北川氏や改革派知事たちが先導したマニフェスト（政権公約）づくりに各政党が取り組んでいる。そこに税財源の分権を明記させ、総選挙の争点にさせるのが北川氏

石原 慎太郎 東京都知事

政界の惑星

「髪が白くなったのは、歳のせいもあるけど、国を待っているというライラするから」（総裁選での

らの戦略だ。それが改革の早道という判断である。

三位一体改革を進めていけば、税収が減る国では消費税の引き上げが課題になることは目に見えている。しかし、各党ともそこに触れたがらない。北川氏は「かつての消費税の悪夢からいかに脱却するかが課題だ。税とこの国の形の関係を真剣に説明できた政党が選挙で圧勝する」と予言する。

説明責任を果たすことに苦心してきた知事たちの経験からすれば、国民に向かって正直に苦いことをいう姿勢こそ大切だ。それがマニフェストの意味だが、各党はその経験を受け継ぐのかどうか。日本経済新聞論説委員兼編集委員

松本 克夫

8・28（木）研究会 記者研修会
司会 菅沼堅吾委員 出席 196人

経世会（現橋本派）の体たらくをみてごまあみろと思う」

相変わらず言いたい放題だ。自民党総裁選や、この秋にも予想さ

れる総選挙など、政局の節目という名前が出てくる。これほど注目される知事は珍しい。昼食会の出席者も、一八四人と記録的だった。

首都東京は国家・社会の最も敏感なモニターだという視点から、日本の枠組みそのものが「金属疲労」を起している、と、持論を披露した。それは明治維新後にできた「太政官」以来の中央集権型官僚制度と、官僚を活用できない政治家に原因があると断言する。

都政に知恵を借りた著名な経営者たちは、都庁官僚の金銭感覚に「なるほど、税金だ！」と、こぞって慨嘆していたという。

東京都では国を待たず、来年度から従来の単式簿記を複式簿記に改めるなど、経営の実態をわかりやすくする。小泉純一郎首相にも「特殊法人改革には会計制度を変

え、会計標準を明確に」と進言したが、わかったといわれたきり。首相の発言は「携帯のメールなみ」だそうだ。

「どの政党も限界効用が来ている。もう一度シャッフル（カードのませ直し）したほうがいい」とどと国政に関心十分な印象だが、復帰の意思をただされると「名譽だが迷惑ですな」と煙幕を張る。会員の間には、うまくはぐらかされたという印象を持つ人もいた。

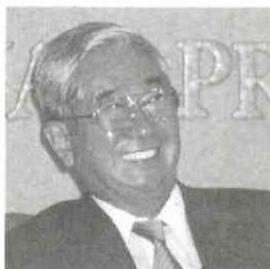
北朝鮮問題では、経済制裁の断行を主張し、カジノの開催でも積極的な姿勢をみせるなど、歯切れのいい発言が続いた。

ところが、大手金融機関への外形標準課税（いわゆる銀行税）裁判で、一、二審とも敗訴になり和解交渉に入った問題を聞かれると、なんとなく言い訳口調に。最高裁では勝つと言いつつ、上告のときの勢いはみられなかった。

石原氏が都政に専心するか、国政に任せぶりを続けるのか。政界の惑星なのは間違いない。

個人会員（東京新聞出身）

塚田 博康



8.29（金）昼食会
記者研修会
司会 宇治敏彦企画委員長
影山日出夫委員
出席 284人

台風10号取材

被災者への配慮欠くクルーも

▼村田 亮

(北海道新聞静内支局)

八月十日未明に襟裳岬に上陸した台風10号は、早朝にかけて北海道を通過、太平洋側を中心に激しい雨を降らせ、各地で河川がはんらんした。最も被害の大きかった日高管内では九月一日現在で五人が死亡、一人が行方不明。道内の被害総額は五百五十億円を越す。

刻きは薄かった。「これといった被害は入ってません」。応対した町職員の声も普段と変わらなかった。だが、未曾有の豪雨は暗闇の中で鋭い牙をむいていた。

そんな大災害が明らかになる前夜、私は支局から、担当する六町にそれぞれ設けられた災害対策本部に警戒電話をかけていた。国道は一部、通行止めだったが、路盤の弱い日高ではいつものことで深

十日未明になって状況は一変。隣町の新冠や門別で行方不明者発生の情報が入った。長靴を用意し、新冠町役場へ向かった。静内と新冠の町境の国道は土砂崩れにより寸断されており、大きくう回を強いられた。町役場の対策本部に一刻と入ってくる情報をもとに、通行可能な道路を確かめ早朝、行方不明者の家族を含む十世帯近くが避難している太陽小へ車を走らせた。

途中、町役場から一キロ余の新冠川沿いに出て驚いた。いつもなら、お年寄りたちの笑い声で盛り上がっているパークゴルフ場が冠

水し、ホルルの旗だけが水面から顔を出し、なびいていたのだ。

衝撃は続く。流木が牧場に流れ込み、大破された牛舎の下で、泥の中に埋もれた子牛が悲鳴を上げている。河川はらんらんにより、道路の片側がざっくりと削り落とされていく。個所もあった。道路自体が冠水し、一時は危険を感じて引き返そうと考えたほどだ。

やっとの思いで太陽小にたどり着くと、避難していた住民は、眠れず寄り添っていた前夜の状況を振り返ってくれた。大洪水で家ごと流された家族とも接触。幼い娘らを傍らに憔悴しきった表情で、恐怖の体験を語る母親に心を痛めた。

その後、台風に対する行政機関の対応の遅れ、連絡の不手際が明らかになってきた。日高山脈を挟んで日高管内と隣接する十勝管内上士幌町の道道では十日未明、橋のたもとが崩壊し、一家五人が乗ったワゴン車が川に転落し全員が死亡した。この事故では道路の交通規制が遅れるなど道の不適切な対応が指摘されている。

新冠町と門別町の境を流れる厚別川はらんらんでワゴン車が流され、三人が死亡した事故でも、国道、町の連絡不足や通行規制の遅れが問題となっている。今後、こうした点をしっかりと検証していきたい。

被災地の現場を歩いて、マスクの取材法に疑問を抱くことも多かった。太陽小では、某放送局のクルーがずかずかと校舎内に入り込み、被災者への配慮を欠いた取材を強行した。被災した児童が通う別の小学校では、映りが悪いからと、始業式のあいさつを何度も子どもに強要するカメラマンを見た。被災者を思いやらず、独り善がりになりがちなの姿も問わなければならないと感じた。

(むらた・りょう)

新冠(にいかつぶ)町メモ

人口 約6,300人
面積 585.88平方キロ

日本一の馬産地・日高管内のほぼ中央部に位置し、面積の77%を森林が占める。名競走馬ハイセイコーやナリタブライアンを生産した牧場がある。通し指した文化によるまちづくりを推進し、1997年には、その中核施設となる「レ・コード館」がオープンした。



北海道

消えたローマ字電報の謎

日月潭の吉田・蔣会談で特オチ

松永

太

赤茶けたスクラップブックの吉田訪台記録の中に、切り抜けなかった記事がある。思い出してもいまいましい。台湾から送った電報が本社に届かなかったのだ。

一九六四年早春、池田首相の懇請に負けて、親分の吉田元首相は蒋介石総統に会いに行かざるを得なくなった。当時、中共（中国共産党政府）の台頭めざましく、国府（国民政府、いずれも当時の紙面略称）の中国代表権維持が難しくなっていた。岸内閣までは日華関係も順調であったが、池田内閣が軌道に乗る頃の世界の趨勢は、北京を国連における中国の代表と

して認めようとする空気に変わりつつあった。フランスの中国承認に続き、米国にも北京接近の気配が感じ取られるようになる。日本国内に「バスに乗り遅れるな」の声が高まってゆく。

日中貿易の進展や対中プラント延払い保証など、日本政府の北京寄り姿勢にヘソを曲げた蔣総統には、「以恩報怨（暴に報いるに徳をもってする）」という、終戦時大陸にいた軍民の優先引き揚げの恩義がある。本来なら大平外相が訪台すべきなのだが、北京への遠慮から逃げ腰だった。

そこで、大物吉田さんに白羽

の矢が立った。池田首相は親書を託し、八十六歳の老体をいたわり「日向ぼつこのつもりで気楽に行ってきてください」と送り出した。この日向ぼつこは台湾紙に「晒太陽」と紹介された。随員は愛娘麻生和子夫人、北沢直吉代議士、木村駐華大使、外務省の御巫課長とナースの五人。一行は二月二十三日の日航機で、五日間の旅に出た。

景勝地でトップ会談

迎える国民政府は、蔣総統の次男蔣緯国中將が接待役、陳誠副総統・張群秘書長・何応欽將軍・嚴家淦首相・沈昌煥外相ら要人がずらり。吉田さんは「日本は自由陣営の一員として反共政策を堅持し、国民政府を見限ることはない」と説得する手はずである。注目の蔣総統とのトップ会談は、まず二十四日台北の総統府で行わ

れ、二十五日夕刻の二回目と二十六月午前の三回目【写真、新聞局提供】は、中部台湾の景勝地日月潭が舞台になった。

東京から取材に派遣された記者団は九人、台湾はもちろんAPはじめ外国からの記者・カメラマン数十人が押し寄せ、湖畔の保養所・教師会館にプレスセンターが設けられ、行政院新聞局は電報局を特設して、直接東京へ打電できるようにしてくれた。

第二回会談後、日本側スポークスマンの北沢会見から現地や外国メディアを締め出してひと悶着があり、送稿開始は夜も更けてからだった。聯合報によると、記者団の電報四十九本は深夜二時まで受け付け、打ち終わったのは朝五時とか。国際電話は八十件、日月潭電報局五カ月分の収入をたった一晩で稼ぎ出したという。

抜け道が裏目に出て

いち早く原稿を送り終わった私は、ホテルで一杯やっていたとこ



ろへ本社から呼び出し電話がかかった。「今、共同電が入ったが、ウチの記事が届いていない。道新さんから競争紙と同じ記事は使えないと矢の催促だ」。そんなばかな、こちらはとっくに着いたはずなのに……

実は、台北を出発する時、アシスタントの呉龔高中日通信員（王沿津東京通信員は拘留中）から「いなかの電報局では、回線を増設してもさばききれないと心配している。電話で私の所へ吹き込んでくれれば、台北電報局から打ってあ

げる」とアドバイスしてくれ、それに乗ったのだ。だから本記、雑

観の二本を台北経由の抜け道で送った。いや、送ったはずだった。それがまだ着いていない。私はなお楽観していた。すぐ呉通信員に電話して、台北局に受理されたことを確認した。それが降版時刻を過ぎても届かず、特オチと知って青くなつた。紙面は共同電で何とかなつたものの、なんのための自社特派員だ。

この謎解きのため、台北に戻ってから呉さんと二人でルート追跡をした。分かったのは、窓口をパスしたローマ字日本語原稿がオペレーターでストップしたらしい。検閲官が電報局スタッフと一緒に日月潭に出張して、留守役がいなかつたのだろう。戒厳令下、未検閲の新聞電報、しかも蔣總統の記事を勝手に打電するわけにいかない。帰るまで留め置かれてポツになつたに違いない。当局は否定したが、幻の原稿はついに東京新聞キャッチャーデスクに届かなか

つたのだ。

要注意記者と目されて

私が要注意人物と目されていたことを、うすうす感じていた。八年前の一九五六年、引揚船興安丸で訪中し、撫順戦犯収容所での満州国高官と日本からの家族面会の取材や、陳毅副総理会見をしたことを国府当局はつかんでいた。

日月潭会谈取材後、記者団は蔣總統との記者会見を待ち続けた。会見は三月四日、高雄の清澄湖賓館でやっと実現した。これを持つ間の雑談で、新聞局幹部が私の北京政府取材経験確かめてきた時、あえて否定しなかつた。

その際、当局がチェックしたのは、二月二十四日に送稿し会谈終了後の二十七日に掲載された「蔣總統のこのごろ」という記事だった。掲載前に彼らは記事内容を知っていた口ぶりだった。その記事の中で、總統が民衆の前に出たがらないこと、身辺の異常なまでの厳戒ぶり、この二つが引っかけか

た。いわゆる本省人（台湾生まれ）が蔣總統と国民党に深い恨みを抱いていることまで書かなくてよかった。

結局、私はおとなしく当局のお膳立てに従って島内視察をしたほか、大陸反攻の最前線、金門島も見せてもらった。各地ルポの一部と写真は、一足先に帰国した記者仲間へ託し、本格的視察記は現地から送らず、帰国後、特集と続き物に慎重にまとめあげた。日華親善に反しないように。



まつながとおる 会員 一九五三年東京新聞社入社 社会部 政治部副部長 六七年中日新聞社 東京人事部長 文化センター事務局長等 関連会社役員を兼任し 現在 新聞社嘱託 中日ビル取締役東京支社長

書いた話

書かなかつた話

緊張・バグダッド

ワーキング
プレス

「スーパードラッグ」の現場

▼小森 保良
(朝日新聞中東アフリカ総局)

イラク取材の拠点にしているバグダッド中心部のバレスチナホテルでは毎夜、銃声や砲声が聞こえる。時折、真っ赤な炎を帯びたものが夜空に飛び交い、ごう音や爆音も響く。イラクが依然、戦闘地域にあることを実感する時だ。こちらに飛んでこないよう、思わず祈ってしまう。

バグダッドの国連現地本部で八月十九日、二十数人が死亡する爆弾テロが起きた。犯行グループは依然分かっていない。ただはつきりしているのは、武装組織の標的が米英の占領軍から、無差別的に拡大したことだ。同月七日にはヨルダン大使館前で車に仕掛けた

爆弾によって十数人が死亡する事件も起きている。物資や人の往來の大動脈となっているヨルダンの首都アンマンとバグダッドを結ぶハイウェイも物騒さを増している。強盗に襲われる事件が後を絶たない。日本人記者も被害にあつた。政治的背景のない一般事件も増えているのだ。米軍は治安が改善されつつあると強調するが、現地で取材する者には空々しく聞こえる。イラクは今まさに、パンドラの箱が開いてしまった状態にあると言えよう。あすはだれが、犠牲になっても不思議ではない。

米兵たちの表情も一層険しくなっている。装甲車の上で機銃を構える兵士はフセイン政権の崩壊からしばらくの間、すれ違うたびに手を挙げ、笑顔を見せた。今は一時たりとも引き金から指を離さな

い。どこから飛び出してくるのか分らない敵におびえているのだ。記者たちの緊張も高まっている。外国メディアの数多くが利用しているこのホテルの駐車場には、厚い鉄板で車体を覆い、防弾ガラスを使用した装甲車仕様の四輪駆動車が並ぶ。欧米メディアが持ち込んだものだ。一台一千万円を優に超えるものもある。日本のメディアで導入している社はまだ限られている。危機管理に対する欧米メディアとの根本的な認識の違いを見せつけられる思いがする。

電気や電話、水道といったインフラの復興も遅々と進まない。このホテルには大型の発電機が設置されており、停電は一日数時間程度だが、一般家庭で電気を使えるのは数時間程度。裕福な層は発電機を所有しているが、燃料のディーゼルが品薄で、常時使えない。南部のバスラでは住民による英軍への抗議デモが断続的に起きている。バスラは五〇度の気温に加え多湿で、気象の厳しさはバグダッドをしのぐ。「世界一の国、米国と英国がなぜ、電気ぐらい短期間に

復旧させられないのか」。人々の復興の遅れへの怒りは、猜疑心も重なりたびたび沸点に達する。

ただ、悲観的な面ばかりに焦点を当てるのは、一面的だろう。民族や宗教・宗派が複雑に絡むこの国で、祖国再建に向けた動きがイラク人によって始まっている。米国が後支えとなり七月に発足したイラク統治評議会だ。早々に瓦解するとの当初の予想に反し、一応の団結を保っている。アラブ各国からその正当性に疑問符を突きつけられているものの、まずは順調な船出といえよう。メンバーの一人は「フセイン独裁体制下で政治には黒か白しかなかった。議論を通じ妥協点を探る政治を初めて経験している」という。

発足の経緯はともあれ、戦争の悲劇を強いられた人々の未来を託す動きととらえたい。そうでなければ、「スーパードラッグ」現場で取材する者には、やるせなさだけが募ってしまう。

こもりやすら ブロック紙を経て一九九二年入社 名古屋本社社会部 カイロ留学などを経て 〇一年から中東アフリカ総局員

ワーキング
プレス

「12歳を考える」取材

▼峠 憲治
(長崎新聞報道部長)

ヒツジ年は波乱の年。共同通信社が出している「編集週報」だったかに、そんなくだりがあった。少し気になって振り返ってみたら、確かに十二年前、外では湾岸戦争が勃発し、県内では雲仙・普賢岳の大火砕流で取材記者らが命を落としている。

前幹事長逮捕、前県議会議長辞職へとつながった自民党長崎県連による違法献金事件、その後のハウステンボスの経営破たん。そして、ようやく統一地方選挙も終わった。本県開催の全国高校総体、原爆報道にさあ本腰を入れよう。その矢先に男児誘拐殺害事件は起きた。

四歳の種元駿ちゃんが、県警本部や長崎地裁の目と鼻の先にある立体駐車場で全裸の遺体で見つかったのは七月二日朝。十二歳の少年によつて高さ二十数メートルの駐車場屋上から突き落とされたのは、前夜の九時過ぎだった。

遺体が見つかった日は久しぶりに朝から好天になった。梅雨のうつつらしい気分から解放されそう。通学の児童・生徒や通勤途上の市民もそう思ったに違いない。遺体発見の携帯が鳴ったのはそんな時間帯だった。

実はこの日未明、福岡県沖の玄界灘で本県出身者らが乗り込んだ巻き網漁船が貨物船と衝突、六人が行方不明になる海難事故が発生。同じデスクから早朝に一報を受けたばかりだった。ついでに言えば少年が補導された九日後に

は、JR特急の脱線事故まで起きることになるのだが。

男児誘拐殺害事件は、駐車場が現場になったことから当初は成人の犯行と見られた。少年の、しかも十二歳の中学一年生が園児に手をかけるなど想像できるはずもない。しかし、いたずら防止を目的に事件の一カ月前に設置された商店街の防犯ビデオに男児とともに写っていたのは、白いシャツに黒いズボン姿の中学生だった。こうして、長くて先の見えない取材が始まった。

補導された少年は「ごく普通の子」(付き添い弁護士)で、学校の成績もよかったという。この事件が何より社会に衝撃を与えたのは、わが子が「被害者」のみならず、「加害者」にもなりうるということではなかったか。

事件直後からたくさんのメール、ファクスが本社に寄せられた。同じ年ごろの子どもを持つ母親が多い。在京のテレビ局をはじめマスコミも殺到した。一部でメディア・スクラム(集団的過熱取材)の指摘があった。それを受けて過

熱取材に対する住民の批判を特集したこともある。むろん、自らも批判されることは覚悟の上ではあったが。

少年の精神鑑定が行われているさなかの八月下旬、小社主催で「緊急シンポジウム―いま12歳を考える」を開いた。少年法によつて情報が限られる中で、できる限りたくさんの意見や考えを市民、県民に伝えたいとの思いからだ。

シンポジウムは大きな反響があった。会場から次々と手が挙がるのには驚いた。今回の事件を身近な問題としてとらえている市民がいかにも多いのがよく分かった。

「こんな事件を最後にするためにも『長崎からの提言』として今後も企画してほしい」。大阪から参加したという女性の意見だ。

精神鑑定は九月十九日で終了する。その後審判が再開され、少年の処分が決まる。長い取材のトンネルの出口は見えないが、試行錯誤の中でより多くの情報を読者に提供していくしかない。

とうげ・けんじ 一九七三年入社 報道部次長 東京支社編集部長 論説委員などを
経て 現在 報道部長兼論説委員

試写会『戦場のフォトグラファー』

信念の報道写真家の軌跡

今城 力夫

「写真がうまく写らなかつたら、もっと近づけばよい」。真つ黒な画面に小さな白抜き文字で映し出される。一九三六年スペイン内乱取材中に「敵弾に倒れる共和政府義勇兵」の写真で一躍有名になったロバート・キャパの言葉だ。このドキュメンタリー映画は、現在の世界のトップに位置するフォトジャーナリスト、ジェームズ・ナクトウエイ氏を描いた作品だが、この遠慮がちな出だしは、物静かで派手な振る舞いをしない彼自身をうまく表現している。

タイム誌などのニュース・マガジンを通してよく彼の写真には接してきたが、戦争に始まり世界中で起こる大事件の現場にはいつても彼がおり、実に不思議な存在として、私の目に彼は映っていた。ニューヨークの海外記者クラブ賞の一つでロバート・キャパ・ゴールド



チェチェン独立紛争で、ロシア軍の空爆を受けた首都グズヌイでの1枚（1996年）

ドメダル賞五回をはじめ、世界報道写真賞二回、その他多数を受賞した彼の優れた報道写真と行動力は、他をはるかに退けた感がある。ベトナム戦争に大きな影響を受けたため、彼は執拗に戦争取材にレンズを向けてきた。「もしだれもが、自分の目で、恐怖と悲嘆をただの一度でいいから見る事ができたなら、何千人どころか、た

った一人の人間でさえ、戦場に立たせる理由などないと理解できるだろう。しかしそれはかなわないことだ。だから写真家がいるわけだ。彼は映画の中で語っている。

表現は悪いが戦争はフォトジャーナリストにとってはひのき舞台だ。憎悪、悲惨さ、残酷さから優しさまで、人間のあらゆる面が現

れる場所が戦争である。大げさに言えば、写真ジャーナリズムの根源は人間追求でもあるわけで、戦争の現場はいやがうえにも写真家を惹きつける。そんな中でナクトウエイ氏は無駄な戦争をなくすために、強い信念を抱きながら十分に力強い写真、より強く訴える写真を撮ることに彼のエネルギーを注いでいく。取材中の彼のカメラに超小型ビデオカメラを取り付けて、いかにも彼のカメラのファインダーをのぞいているかのような映像が出てくるが、珍しい試みだ。直後に彼の撮った写真が映し出され、作画の素晴らしさにギョッと身が引き締まる。戦争の悲惨さを強烈にして、美しく描写している。

「戦争で悲惨な状況にある人た

ちの写真を撮る時は、彼らと話をしなくても、撮られる側に自分が受け入れられなければ求める写真は撮れない」と語っている。「心を通じ合うために、その人たちの前ではできるだけゆっくり歩き、大声を出したりしないよう心掛けている」とのことだ。

ふと一九六三年の国鉄鶴見事故を取材した時のことを思い出した。近くの総持寺に多数の遺体が安置され、当時の石田礼助国鉄総裁が来られたが、慌てた報道カメラマンの一部は棺をまたいで移動した。遺族の方が激怒し「お前らは何だ、報道の奴らは出ていけ」と怒鳴ったことがあった。引つ込み思案ではフォトジャーナリストの仕事は勤まらないが、彼の取材に対する姿勢は見習わなくてはならない。

後半で彼の仕事に対する哲学と信念を丁寧に語る部分は、この映画の圧巻である。また、これだけ優れた報道写真家を英雄仕立てにせず制作した点は、非常に素晴らしく、嬉しい。

いまじょうりきお会員R.A.P. ワイドワールドフォトズ・ディレクター

◇個人D会員

プロフィール

八月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方々です

情報発信

桂林観光 中国人にとっては、天
下に甲たる桂林山水は、日本人に
とって富士山みたいなもの、と王
躍民人民政府市長(45)。四八〇
万人を代表して、観光プロモー
ションのため三十人而来日。S A
RSは一例も発生しなかったが、
年間約九〇万の外国人観光客の受
け入れ実績に与えた影響は甚大だ
ったようだ。「紅いコリヤン」

で有名な張藝謀監督の最新作「H
ERO」の美しい背景の多くは桂
林で撮られたものです、と穏やか
な口調でPR。来日直前、監督に
会ったら、日本で八月から公開す
るので宣伝をよろしく、と頼まれ
たという(7・30 Bホール)

時事・ロイター「金融証券情報」
で戦略的事業提携 榊原・時事社
長とロイタージャパンの武井社長
が記者発表。時事の国内最高水準
の金融証券・企業情報や全国的営
業・サポート網と、ロイターのグ
ローバルな金融証券情報と金融情
報テクノロジーを融合させる。フ
ェーズ1として、九月からウェブ
を利用した共同サービス「MAI

N EX-1」(月額三万円程度
を予定)を発売。両社は①今年三
月から海外企業ニュースの共同翻
訳を実施、新サービス開始の九月
には②ロイター大阪オフィスを時
事支社へ統合③十一月には企業財
務データ配信提携④来年四月まで
に新金融証券サービス、フェーズ
2の共同開発を進める。

榊原社長は質問に答え、編集部
門の一体化と将来の資本提携につ
いては否定したが、時事の金融証
券情報部門をさらに強化する意向
を示した(8・6 Cホール)。
BSデジタル大賞 番組や企画の
顕彰を通じて、BSデジタル放送
の普及促進をはかることを目的と
したもの。昨年に続きことしも実
施することが推進協会(BPA)
の伊藤邦男理事長らによって発表
された。対象期間は昨年十一月一
日から十月二十日までで、テレビ
番組、ラジオ放送、データ放送、
キャンペーン、技術の五部門で各
賞を選び、その中からグランプリ
を決める。賞の授与は地上波デジ
タル開始の十二月一日、帝国ホテ
ルで(8・28 大会議室)。



バルセロナで開催された世界水泳選手権の平泳ぎ100メートルと200メートルで世界新記録をマーク、初優勝した北島康介選手

写真部

写真 中田 徹

(一九九一年朝日新聞入社。大阪写真部などを経て二〇〇〇年から映像本部写真セクション員)

表情と文化

スポーツ選手のガッツポーズはさすがらしい。気分の高揚が伝わってきて、見ているこちらまで興奮してしまう。

いまでこそガッツポーズに眉をひそめる人はいないが、ひと昔まえまでは「はしたない」こととみなされた。いつだったか、甲子園の全国高校野球の試合で、ホームランを打った選手がガッツポーズをしながら走ったのを、高野連のお偉方が「けしからん」と文句をいって話題になったことがある。

だが、スポーツ以外の勝負の世界、たとえば将棋や囲碁では、いまでも勝者がうれしそうなお顔を見せるのはご法度である。あるテレビのインタビュアーで将棋の羽生善治棋士(現四冠)が「勝っても笑うことは厳禁です」と語っていた。勝者が敗者の前で喜びをあらわにするのは礼を失することになるからだという。

はしたないという感覚は、日本の社会で長い間はごくまれてきた精神の美学の表れだろう。礼を大事にするというのは、これまた精神を律する規範のひとつだ。たまたまスポーツという国境の垣根の低い世界では、喜怒哀楽を素直に表現する欧米流への抵抗が少なかつた。だから、表現のグローバルゼーションも容易だったのだろう。しかし、こと、「道」のつくような分野は、文化が結晶した世界である。表情一つとっても、独自性は失われにくいかもしれない。

(友田 錫)

「核をめぐる多国間協議」残部があります

絶妙のタイミングで出たこともあり、倉田秀也杏林大学助教授の記録版第18号（8月13日発行）は骨格がしっかりしたよいテキストと好評です。若干の残部があります。会員登録が比較的少ない、地方紙、地方局で編集・報道関係者の資料としてご希望のところへは、東京支社経由でお送りいたしますので、事務局（03-3503-2722）へご連絡ください。

『新聞記者という仕事』

柴田 鉄治（朝日新聞出身）

米同時多発テロ以来、世界はにわかにな臭くなり、日本も有事法制だ、戦争地域への自衛隊の派遣だといった方向へ走りだしたのに対し、新聞のチェック機能はなぜ働かないのか。「二度と戦争には協力しない」と誓って日本の新聞は戦後の再出発をしたのではなかったか。そんな憤まんから



「新聞よ、しっかりせよ」という思いを込めて書き下ろした。私が考える「新聞とは何か」をまとめた私なりの新聞ジャーナリズム論である。

（集英社新書 六六〇円）



見学会 北朝鮮工作船

(8.4 参加者=100人 船の科学館)

銃撃戦の跡が生々しく残る工作船 格納されていた小型舟艇や武器類も見学

☆9月のレストラン(夜)のご案内☆

和食(9階) 松茸懐石コース 松茸の土瓶蒸し、鴨と松茸の塩焼き、秋野菜の吹き寄せ煮、そして松茸ご飯と松茸づくしの懐石料理を九月三十日まで期間限定で提供します。お一人五千円です。予約は3503-2723へ。洋食(10階) 伊勢海老コース ゆでたての大きいな豪州産の伊勢海老を、香り高いサフランソースでめしあがっていただくコースです。前菜三品に洋ナシとアイスクリームのデザート、グラスワインがついて四千六百円。総カロリーは抑え目の七六〇キロカロリー。十一月末までおたのしみいただけます。予約は3503-2766へ。

クラブの電話

- (ダイヤルイン)
- ・和食レストラン(9階) 3503-2723
 - ・洋食レストラン(10階) 3503-2766
 - ・貸室予約 3503-2724
 - ・受付、宴会打ち合わせ 3503-2721
 - ・クラブ行事への申し込み 3503-2722
 - ・会員事務 3503-2725
 - ・経理 3503-2728

△法人会員代表変更▽

東京スポーツ新聞社

(新) 江幡 幸伸 取締役編集局長

(旧) 桜井 康雄

大阪放送

(新) 佐藤 賢三 代表取締役社長

(旧) 渡邊 辰雄

アール・ケー・ビー 毎日放送

(新) 永守 良孝 取締役東京支社長

(旧) 熊本 誠

会員現況 法人会員 一四九社 基本会員

八〇六人 個人会員 一、七三三人 法人・

個人賛助会員 八二社 二一〇人 特別賛助

会員 六六人 名誉・功労会員 一二人

計 一三二社 二、八二七人

会報委員会

委員長 住田良能

委員 仙石伸也 永井多恵子 中園龍二

橋場義之 福沢亜夫 元田 成

連絡 長谷川和子 本庄五月

(電話) 〇三三三〇三二七五二

(FAX) 〇三三三〇三七二七二